
らき すた キミがいるセカイ NW

牛乳帝国

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

らき すた キミがいるセカイ NW

【Nコード】

N5639G

【作者名】

牛乳帝国

【あらすじ】

ネクストワールド

NW。その少年の歩く道は、とても険しいものだった。だけど、立ち止まってしまった少年を再び歩き出させた少女達がいた。再び歩き出した少年の目の前には、どんな景色が広がっているのか。なら、一緒に見に行こうぜ、なあ？次のセカイへ、歩き出そう……

第一章 一話「いざ!!海へ!!」

ん？俺になんか用か？

え？高校時代の話？

何だよやぶからぼうに

まあ、俺の人生で一番充実してたつてのは確かだと思っ

え？詳しく話せて？

お前ってそういう図々しいところがあいつにそっくりだな・・・

・

はいはい、話せばいいんだろ？

けど、あんまり期待するんじゃないぞ？

期末試験が終わり、もうすぐ夏休みと言っ今日この頃
皆様いかがお過ごしだろうか

授業が終わり帰り支度をしていると

「海に いか ない か」

「なんだやぶからぼうに」

こなたが突然こんなことを言い出した

「だから、海にいかない？」

「海・・・・・・ねえ」

いきなり海と言われてもな・・・・・・

（そういえば昔、梨花と行ったな・・・・・・）

『おにいちゃん！！はやくはやく！！』

『ちょ、ちよつとまでよ！！』

・・・・・・

「りかあああああああああ！！」

「あーあ、シスコンお兄ちゃんモードになっちゃったよ」

「し、シスコンじゃない！！妹思いなだけだ！！」

「十分シスコンよ」

お？この声は

「かがみか」

「大正解」

かがみいつものツインテールで現れた

「かがみん、つかさたちは？」

「もうすぐ来るわよ」

ちなみに今この場にいない二人

つかさは授業中に鳴ってしまった携帯を黒井先生に返してもらいに

行っている

みゆきは委員会関係の仕事で

すぐ終わるそうだから待っている

「あゝ、そうだセイカ君」

「なんだよ」

「海に行く日の予定はあいてる？」

かがみが聞いてきた

俺は携帯の予定表を見る

「ああ、特に用事はないな」

「それじゃあ決まりだね！！」

俺には拒否権は無いのな……………

いつものことだ

朝の7時に泉家に集合！！か

「で、何でその泉家に住んでるお前が一番遅いんだよ」

「むしろ何でセイカ君が一番乗りだったのか聞きたいね

昨日一緒に最後までネトゲやってたのに」

「知るか」

昨日俺とこなたは同じネトゲをやっていたんだが……………

なんか敵の沸きがよくて朝の4時くらいまで狩り続けていたのだ

「っていうか、俺も結構眠いぞ……………ふあ」

「しゃきつとしなさいよ」

俺が到着してすぐにやってきたかがみが言う

「海ってひさしぶりだよ」

「楽しみですね」

つかさとみゆきはすでに気持ち海のほうへ行っているようだ

「お、お待たせしましたー！！」

ん？この声は……………

「ゆーちゃん、体調はいい？」

「うん！！いつもより気分がいいよ」

「小早川もメンバーだったんだな」

「うん、おとーさんが仕事関係のパーティーに呼ばれちゃったから」
なるほど、小早川が一人になっちまうな

それでついてくるってわけだ

「平野先輩、こんにちわ」

「おう、旅行の間よろしくな」

頭をなでてやると嬉しそうにはにかんでいた
なんていうか・・・普通にかわいいな
こなたもこれくらい可愛げがあればいいのに・・・

「何か失礼なことを考えてない？」

「気のせいだ」

毎度毎度こいつは勘がいいな・・・

「そして引率はウチらや」

「げえっ！！黒井先生！！」

「げえっ！！ってなんや？あ？」

「なんでもないでs・・・」

なんでもないです

と言おうとしたがもう一人が目に入ってしまった

「わったしもいるよー！！」

「成美さんっ！！」

え？なんで自慢げに車の前でガッツポーズしてらっしゃるんですか？
あのチヨメチヨメDも真っ青な車に乗れと？

「黒井先生！！今回はよろしくお願いします！！」

「お？おう！！まかせとき！！」

「よし、俺は黒井先生のほうの車に乗るからな」

「（セイカ君、逃げたね・・・）」

んじゃあ私も」

と言いながらこなたが黒井先生の車に荷物を積み始める

「わ、わたしも」

こなたに次いで小早川も

そりゃあ小早川はあの運転を知ってるもんな

「それじゃあ私達は成美さんの車ね」

「成美さん、今日はよろしくお願いします」

「お手数おかけします」

かがみとつかさとみゆきが成美さんに挨拶をしている
すまん、俺達を救ういけにえとなってくれ!!

「それじゃあ出発するよ〜ん!!」

成美さんが高らかに車にエンジンをかけた
俺とこなたは前方の車に敬礼をした

（かがみ、つかさ、みゆき

お前らのことは忘れないよ・・・）

その後、悲鳴がとどろいたのは言うまでも無い

10分後

「黒井先生」

「なんや」

「ここはどこですか!!」

今俺達がいるのは思いつきり山の中

さつきは小学校のグラウンドに突っ込んだりなんかよく分からない
密林に突っ込んだり

（くそ!!どっちもはずれだったか!!）

「海だな・・・」

「海だね・・・」

「海ですね・・・」

俺、こなた、小早川は海を見つめる

その隣にはかなり顔を悪くしたかがみ、つかさ、みゆきがいる

すでに空は夕焼けのオレンジに染まっていた・・・

「時間がかかりすぎだあ

！！」

「話 いざー！ー海へ！ー！

おわり

第一章 一話「いざー!!海へ!!」(後書き)

さーて!!次回のキミセカNWは!?

セイカだ

まさか黒井先生が方向音痴なんて・・・

さすがに予想してなかったぜ

次回は海でひたすら泳ぎまくる!!

ぶふっ!!こなた!!お前なんてかっこうしてるんだ!!

次回

「砂浜の水着パラダイス!!」

俺にとっては、地獄だよ・・・

第二話「(死亡)フラグメイカー」(前書き)

二話目にしてさっそくの次回予告変更
正直スマンかった!!

第二話「（死亡）フラグメイカー」

第二話

「あゝ、どつと疲れたぜ……」

自分の部屋に倒れこむ

自分の部屋と入っても旅館の自分に割り当てられた部屋だが
疲れてる理由なんてひとつ

やけに時間がかかった黒井先生の運転だ

おそらく成美さん組も部屋で休んでいるだろう

かがみに聞いた話だとかっぱり峠で他のドライバーと一戦したようだ
それでいいのか警察官……

「おゝい、セイカくん」

そこからこなたの声が聞こえる

「はいはい、なんだよ……ぶふっ!!」

目の前にはなぜかスク水姿のこなた

「なananなんちゅーかつこうしてるんだお前は!!」

閑話休題

後からやってきたかがみの鉄拳制裁によって自室に強制送還された

こなたが浴衣を着なおして帰ってきた

ほかのメンバーも浴衣姿である

ちなみに作者が「ゆかた」と打とうとして「ゆたか」と何度も打ち

間違えたのはひみつだ

とりあえず感想を一言

「こなたと小早川のサイズの浴衣があつたのか……」
こなたと小早川（主にこなた）にすっごいにらまれた
「だけど、みんな似合ってるぞ」

そんなこんなで温泉に向かう

ちなみに引率組はすでに酒盛りを始めているらしい
晩飯もまだなのに……飲んだくれめ

「温泉楽しみ」

つかさがお風呂グッズを片手にご機嫌な表情で歩く
好きなんだろうか、温泉

「お風呂は好きだけど皆で一緒って言うのがうれしくて」
なるほど、つかさらしい理由である

「セイカ君、覗いたら殺すわよ」

「そんなつもりは毛頭ございません」

かがみの冗談なのかよく分からない忠告を一応聞いておく
まあ、そんなマンガみたいな展開は無いさ

……無いと信じたい！！

「……なんで誰もいないんだ？」

俺が温泉に入ると中には他の客が一人もいなかった

一人くらいはいてもおかしくないのにな

「……まで、なんか嫌なフラグが立った気がする」

露天風呂&思いつきり突っ込めば穴ぐらい開きそうな男湯と女湯を
隔てる柵

「できるだけ柵には近づかないでおう」

『やっぱりみゆき胸おつきいわね』

『高良先輩ってスタイルよくてうらやましいな……』

『大丈夫だよーちゃん！！貧乳はステータスだ！！』

『この中だとゆきちゃんの次にはお姉ちゃんがおつきいんだね』

『つ、つかさ！！余計なこといわない！！』

……あいつらには羞恥心って物が無いのだろうか

聞いているこっちが恥ずかしい

『おーい！！ほかの客の迷惑になるからあんま騒ぐなよー！！』

こっちには客はいないが

『だいじょーぶ！！こっちは一人もほかのお客さんいないからー！

！』

なんと、女湯もこんな状況らしい

この旅館の経営は大丈夫なんだろうか

「つと、俺はそろそろ上がるぞー！！」

『ほーい！！』

さすがにつかりすぎた

「このままだとのぼせそうだ……つとと」

いきなり湯船からあがったので軽くめまいがした

倒れそうになったが柵にもたれかかって事なきを……

ん？柵？

フラグ ON！！

ミシ……

何だこの音は？

具体的には柵と柵をつなぐロープが切れそうな

ご 名 答

「うわわわわ!!」

柵に全体重を乗せていたので抵抗などできましえん
柵の一角が倒れて・・・

「あ・・・」

「「「「あ・・・」」」」

・・・

とても神秘的な光景である

どちらだと聞かれれば美少女の部類に入る女の子が女湯にいる
もちろん「お風呂」裸」だ

湯船に使っていたのももちろん体にタオルなんて巻いていない
湯船にタオルは入れちゃいけないからな

これ、お兄さんとの約束だぞ?

よいこの皆はちゃんと守ろうね?

まあ、タオルなんて巻いてないってことはその・・・はだか
を丸出しなわけで

それは俺も例外じゃないわけで

「「「「・・・」」」」

沈黙が続く

「セイカ君、辞世の句は読めたかしら?」

がんばって手で胸を隠そうとしているが無駄な努力のかがみさんが
言いました

「いままで楽しかった、ありがとう」

ごふうっ！！

ああ、今お前のところに行くからな？梨花・・・

あと、かがみ

お前ダイエツトするほど太ってないじゃないか・・・

こなた、小早川、まだまだこれから成長するさ・・・

つかさ、控えめだけど俺はいいと思ったぜ・・・

みゆき、お前は反則だ、OGだおっぱいジェネレーション

その後、俺の意識は途絶えた

第二話「(死亡)フラグメイカー」(後書き)

さーて！！次回のキミセカNWは！？

こなたです

水着はさすがのセイカ君も驚いたよね
作戦成功！！

裸を見られた・・・・・・・・

なんで？なんでこんなにドキドキしてるんだろ・・・・・・・・？

次回「浜辺のコイゴコロ」

なんだろ、この感じ

(内容は変更する可能性も無くはない)

第三話「浜辺のヨイコロ」

第三話

「青い海っ!!」

「白い砂浜」

「焼け付くような太陽」

「ついでにみゆきさんのおっぱい!!」

上からかがみ、つかさ、みゆき、言わずもがなこなた
っておい、最後は違うだろ

まあ、シメは俺だな

「海だあ

!!」

いまだに昨日のかがみの攻撃が痛い但我慢しよう
っていうか、昨日のアレはその辺の不良の一撃よりもきつかった
さて、同級生組は海へ走っていったが

「あんた達は・・・・・・・・」
後ろを見る

そこには二日酔いで死に掛けている引率組がいた

「教師に……むかつて……アンタとはなんじゃぼけえ……」

「そんな青い顔で言われてもまったく怖くないですよ」

「いつもの勢いはどこへやら」

「完全に生ける屍と化している」

「うう、二日酔いするなんて……」

「おねーさんびつくりだ」

「お姉ちゃん、大丈夫？」

小早川が成美さんの背中をさする

ふむ、中のいい姉妹の図だ

(……いや、お母さんと娘にも見えるが)

小早川はちっこいからな

「ゆたか、もーいいよ」

「こなたたちと遊んでおいで」

「本当に大丈夫？」

「へーきへーき」

せつかくの海なんだから楽しんでらっしゃい!!」

成美さんの言葉で小早川が俺のほうに駆け寄ってきた

「それじゃあ先輩、いきましようか」

「おう、あの二人はほっとけばそのうち元に戻るさ」

「セイカ君!! そっちいったよ!!」

「飛ばしすぎだ馬鹿!!」

現在泳ぎにあきた俺たちは砂浜でビーチバレー中である

「といつてもネットも何もなかっただボールをパスしあってるだけだが」

「ほらほら!! セイカ君すきだらけよ!!」

「いてっ!!」

ドッジボールじゃねえんだからさ!!」

いくらかはしゃいだ後、俺はひとまず抜けた
近くで休んでいる小早川んところへ行く

「大丈夫ですか？」

「ああ、一応な」

かがみのやつ……本気でぶつけやがって
ビーチボールでも思いつきりぶつければ痛いんだぞ？

「小早川は体調は大丈夫か？」

結構はしゃいでたけど」

「はい!! なんだかすごく調子がいいんです

先輩がいるからかな？」

小早川の言葉に首をかしげる

「ん？何で俺？」

「なんだか先輩といると落ち着くんです……
それにお兄ちゃんっていうのに少しあこがれてましたから」
えへへ、と恥ずかしそうに笑う

なるほど、こなたが真の妹属性というだけあるな

「ならお兄ちゃんってよんでみたら？」

「うおっ!!」

後ろからの声に振り返る

そこにはニヤニヤ顔のこなたと成美さん

つてか、成美さんはいつの間に復活したんだ

そしてこなたはいつの間にこっちに来てた

「いや、セイカ君とゆーちゃんが兄妹オーラ全開だったから」

「どんなオーラだ」

こなたとのやり取りの最中に視線に気づく

「あの、先輩？」

「なんだ？」

小早川がじっとこっちを見ていた

「お兄ちゃんって、呼んでもいいですか？」

「ごふっ!!」

「し、しまった!!」

シスコンのセイカ君には強力すぎたか!!」
こなたが騒ぐ

ああ、そのとおりだ

破壊力抜群すぎるぜ今のは……

「ああ、好きに呼んでくれ!!」

俺もゆたかつて呼ぶからさ!!」

「うん!!お兄ちゃん!!」

そのころ

「ねえつかさ、みゆき」

「どうしたのおねえちゃん？」

「どうかなさいましたか？」

「セイカ君ってさ」

記憶を取り戻してからキャラ変わってない？」

「たしかに……」

「そうですね……」

「さて、昼飯や!!」

「復活早いですね……」

案の定元気を取り戻した黒い先生を先頭にして海の家に入る
それぞれラーメンだのフライドチキンだのを注文する
ちなみに俺はかがみと同じくラーメンである

「いただきます」

全員に食事が届いた

「おお！！期待通りだ！！」

「どした」

「みてよこの見事に具のないカレー！！」

こなたが皿を突き出してくる

「おお、確かに典型的な海の家カレーだ」

野菜のかけらのみ、肉なし

見事な安物カレーだ！！

そしてそれにつりあわない高い値段！！

「ぷはー！！やっぱ海のビールは最高やー！！」

つて！！アタはまた飲むのか！！

「だいたい、フランクフルトが一本三百円とかおかしいんですけどね」

「たしかにな」

「けど、気にせず食べちゃいます」

かくいうゆたかが持っているのはその一本三百円のフランクフルト
だったりする

「私このチキンの油っこいのとかスパイスかかりすぎてるとかも
実は好きだったり」

つかさが食べかけのフライドチキンを差し出す

「一口食べる？」

「お、サンキュ」

むしゃり

「油っこい！！ってか辛っ！！けどそれがたまらん……」

「こついったプレーンな焼きそばもなかなかいいですね」

みゆきが焼きそばの入ってるトレーを持ち上げる

「あ、セイカさん一口いかがですか？」

「いいのか？それじゃあ……」

ずるずる

うん、このもさもさしててキャベツが少ししか入ってないところがいい

夏祭りの出店とかもこんな感じだよな

「おお！！なんかおすそ分けブームだね！！」

それじゃあ私のカレーも」

こなたがカレーの入ってるスプーンを差し出す

「……なんだよ」

「だから『あーん』ってさ」

「ぶふっ！！何いってんだおまえは！！」

しかしこなたはいまだに「ホレホレ」とスプーンを差し出してくる
ええい！！

ぱくっ！！

「はいセイカ君、間接ちゅーいただきました」

「ぶふっ！！」

げほっ！！

「こここなた！！あんたなにやってくあwせdrftgよぶじ」
lp！！」

お、おちつけかがみ！！

「じ」

「じ」

「じ」

「じ」

はっ！！なんか四方向から視線が……

こなたview

うわ．．．いきおいでやっちゃったけど．．．
これほんとに間接キスだよ．．．
どうしょ、ドキドキがとまんない．．．
やっぱり、私って．．．
．．．．．セイカ君は私のことどう思ってるんだろ？

セイカview

部屋にしかれている布団に身を投げる
全員からの「あーん」ですっかり疲れた．．．
周りからの視線も痛かったし．．．
「．．．．．明日で旅行も終わるか」
長いようであつという間だったな
そこはかとなし寂しさもある
そろそろ寝ようか．．．
「おやすみ．．．」

その後

俺の部屋に一人の来訪者が来ることになる

第三話 おわり

第三話「浜辺のヨイゴコロ」(後書き)

さーて、次回のキミセカNWは!?

かがみです

今日のこなたなんか変だったわね

いつもと違うというか………まあいいか
いや、私は平気よ!?

ぜんぜん怖くなんて………うひゃあ!!

次回「最後の夜、ホラーの夜!!」

お、おたのしみに

第四話「最後の夜！！ホラーの夜！！」

第四話

こんこん

浅い眠りに落ちていた俺の耳にドアをノックする音が入ってきた
むくりと布団から体を起こす

「んゝゝゝだれだ？」

こなたか？

いや、あいつは「こんこん」じゃなくて「どんどん！！」だな
するとゝゝゝゝだれだ？

とりあえずドアをあけた

「よっす」

「なんだ、かがみか

どうした？」

目の前には浴衣姿のかがみがいた

「ねえ、少しいい？」

本当は眠るつもりだったのだがゝゝゝゝ

まあ、いいか

「ふう、外の空気は気持ちいいわね」

「そうか？大して変わらないと思うが」

けど目を覚ますのにはちょうどいいな

潮風だからあまり気持ちがいいとはいえないが

鼻に入る潮の香りがここが海なんだと思ひ出させてくれる

「ってかどうしたんだ？こんな時間に」

腕時計が指している時間は午後10時

「ちよつと話したいなって思っただけよ」

「ふん．．．．．」

かがみは宿の前にあるブロックに腰掛けた

「あんたも座つたら？立ちっぱなしじゃきついでしょ」

言われるがままにかがみの隣に腰を下ろす

そこまで大きいブロックじゃないので完全に密着した形になる

（ってか、いい匂いがする．．．．．）

かがみが風呂上りだからだろうか

それとももとの匂いなのか

（って、なに考えてるんだ．．．．．）

普段は口が荒いがこういうときはかがみも女の子なんだと思う

「．．．．．ねえ、セイカ君」

「んあ？」

さつきまで黙って空を見上げていたかがみが話し出した

「私さ、今すごく楽しいのよ」

「？」

「こなたもつかさもみゆきも．．．．．セイカ君も隣にいる

それでバカなことで笑ったり喧嘩したりする今が．．．．．す

ごく楽しい」

「．．．．．かがみ？」

「ずっと続けばいいなって思うんだ

バカだよ、ずっとなんてあるはずないのに」

ずっとなんてない

そつだ、いつかこの楽しい日々も終わりを告げる

そつ、いつかは終わってしまうんだ

「．．．．．だからさ、後悔したくないのよ」

「後悔？」

「．．．．．そつ、後悔」

そういつとかがみは俺の肩に頭を乗せた

「・・・・・・・・どした？」

「・・・・・・・・ごめん、すこしこのままでもいいかな」

「・・・・・・・・ああ」

かがみの頭を肩に乗せのせたまま空を見上げる

この空には終わりがあるのだろうか

どこまで続くんだろう

気がついたら、俺はかがみの手を握っていた

なぜかはわからないけど・・・・・・・・

ただ、隣の小さな存在を確かめた語っただけなのかもしれない

かがみview

ごめんね、セイカ君

まだ・・・・・・・・まだ言えないんだ

自分でも、この気持ちに本当かわからないから

だから、もう少しだけ待ってほしい

私の想いは叶うかどうかわからないけど

もう少し、この幸せな時間を・・・・・・・・

セイカview

かがみを部屋に送り届けた後

俺も自分の部屋に戻ったのだが・・・・・・・・

「・・・・・・・・トイレ」

というわけで廊下のトイレに行こうとしたところ

「おゝ、いたいた」

前からアホ毛幼女が走ってきた

「・・・・・・・・夜中に騒ぐんじゃありません」

「はいはい、それはそうとちょっとうちの部屋にきてよ」

「・・・・・・・・わかった、その前にトイレに行かせてくれ」

「それでね、これは実際にあった話らしいんだけど・・・・・・・・」
かがみがつばを飲み込む

つかさとみゆきは抱き合い黒井先生と成美さんが固唾をのんで聞き入っている

ゆたかは俺の袖にしがみついている

「あるアニメーターが仕事帰りのバスで疲れがたまってたのか寝ちやってね？」

「・・・・・・・・おい、何でみんなそんなに怖がってるんだ

これどつかの掲示板で読んだことあるきがするぞ

「運転手さんはその人がまだ残ってることに気づかなかったのかおもむろに・・・・・・・・」

「DANZEN二人はプリ ユアを歌いだしたんだよ

「！！」

「「「ひゃうううううー!」「」「」

「……………こなた、それって話が怖いって言うよりお前の顔が怖いぞ

「ごめん、私少しお手洗いに……………」

つかさが席を立った

だが入り口で止まっている……………」

「……………ついていつてやろうか?」

「へ!?えーと……………お願いします」

やっぱり怖かったのか

ここからトイレまで結構距離あるしな

「ごめんね、どうしても怖くて」

「まあ、さっきの(顔が)怖い話の後じゃしょうがないさ」
トイレの前まで行く

「どっかないかねえね!!そこにいてね!!」

「わかったから早くしろ」

つかさがトイレに引つ込む俺は壁にもたれかかって時間をつぶした

「お、おまたせ」

「よし、んじやもどるか」

と、後ろを振り向いたときだった!!!

「ス キヨです」

「ぬおあ!!」

「ひゃう!!」

某一族のマスクをかぶった奴の顔が!!

おおおちつけ!!ここここういときは素数を数えるんだ!!

0 1 2 5 3 7・・・って1は素数じゃない!!

しかしそのスケ ヨはマスクを取った

その顔は

「こなた!!」

そんなもんどこから持ってきた!!」

こなたを追い返して元の部屋まで戻ってくる

がらっ、とドアを開けると

「犬神家!!」

「ひゃうううう!!」

「・・・さっきからなにやってんだおまえは」

こなたが足だけを布団から出して例のポーズを取っていた

「からかいがいあるなあww」

そんな感じで最後の夜は更けていった・・・

第四話 おわり

第四話「最後の夜！！ホラーの夜！！」（後書き）

さーて！！次回のキミセカは！？

つかさです

昨日メールでこなちゃんにお祭りに行かないかって誘われたの
日本で最大級のお祭りなんだって！！

たのしみだな

けど動きやすい服装でって・・・なんでだろ

次回

「聖地での戦い」

ふえ〜ん！！セイカ君！！たすけてー！！

おたのしみに！！

第五話「聖地での戦い」

第五話

「あー、あづーい……………」

俺は学生服で通学かばんを手に持ち学校への道のりを歩いている
なぜ夏休みに学校に行くかって？

そりゃあ……………」

補修だからさ！

二週間ほど前

「平野ー、ちよつと来いや」

「なんですか？」

黒井先生に呼び出される

「ほいこれ、古文と英語の先生からや」

そういつて二枚の紙を手渡された

そこには……………」

【夏季長期休暇補修の案内】と描かれていた

「……………」これは一体？」

「みてのとおりやな」

あー、つまりだ

文型のくせに古文と英語ができないとはこれいかに
と思った先生方がありがたい講義をしてくださるあれか
あー、なるほど・・・・・・・・

そして今に至る

「さっすがセイカ君！！私たちの期待を裏切らない！！」

「いいんだよ、毎年あきらめてるから」

案の定というかなんと言うか・・・・・・・・

目の前にはこなたとつかさがいる

「セイカ君は二つだけかもしれないけど私は三つあるんだよ・・・・・・・・

・・・・・・・・

つかさが言った

「まあまあ、そんなくらい話題はおいておいてさー」

こなたが話題を変える

「なんだよ」

「お祭りにい　か　な　い　か」

「こなちゃん、それ海のとくと同じノリだよ？」

「つかさ、お笑いには同じネタを繰り返すというものがあってだね・

・・・・・・・・

・・・・・・・・・・かがみ、だめだ

俺一人では突っ込みきれない・・・・・・・・

「で、祭りって？」

「ああ、東京のほうで大きい祭りがあるんだよ」

へえ、夏といえば祭りの季節だからな

一緒に行くのも悪くない

「いいぜ、一緒にいつてやるよ」

「わたしもー、お祭りつて大好きだから」

「おkおk、日程は後でメールするね」

そのときの俺は、なぜ行くといつてしまったのだろうか
なぜこいつの行きそうな夏に行われる祭りを忘れていたのか
今となつては後悔しても遅いのである

「えーと、財布持つたし携帯持つた

けど何で動きやすい服装なんだ？」

こなたのメールにあつた物をそろえる

「つてか、何で祭りに糖分ありの飲み物なんだよ

むここの屋台で帰るだろうに・・・ラムネとか」

まあ、文句を言つても始まらない

待ち合わせ場所の駅に向かうべく俺は家を飛び出した

「悪い！待たせた！！」

「遅いよー、早くしないと電車出ちゃうじゃん」

「そもそもこんな朝早くに集合する意味あるのか？」

その祭りとやらはこんな朝早くからやっているものなのだろうか
ちよつと早すぎると思う

「そしてかがみもいたんだな」

「・・・あんな魔境につかさを一人で生かせるのは忍びなく
つてね」

は？魔境？

ちよつと待て、何で祭りが魔境なんだよ
「行けばわかるわ、そう・・・逝けば」
何かかがみが遠い目になつてゐる

・・・・・・・・ちよつと不安になつてきた

電車に乗つて数分

いくつかの駅を過ぎると次々と人が入ってくる

一般の服装の人だけではなく秋葉でよく見かけるタイプの人間がち
らほら・・・

いや、めちやくちやいる

ここで気がついて引き返してれば・・・

それも今さらである

駅からひとつの建物に向かつて伸びる黒い線

それが人であるのは一目瞭然である

そしてその先にたっているのは

某逆三角形の建物だつた・・・・・・・・

第五話 おわり

第五話「聖地での戦い」(後書き)

あ、あれ？ここどこだ？

南のC-2？ここ東？

おい、こなたー、かがみー、つかさー……………

次回

第六話「迷走」

誰か……………助けてくれ

第六話「迷走」

第六話

「かがみはこれ、つかさはこれ、セイカ君はこれだからね!!」
こなたから紙を手渡される

そこには会場内部の見取り図に丸がついていた
「丸がついてるサークルの新刊を最低ひとつずつ
できれば三冊買ってきて!!」

あと折り曲げたり傷をつけたりしないように」
そしてさらに紅茶のボトルと財布を渡される

「適度に水分補給を忘れないように」

それで12時になったら緑の丸のところに集合ね
もしこなかったら携帯に連絡して返事がなかったら医務室行くか
ら」

まで、何でもこういうときだけお前はハキハキしゃべるんだ

「じゃ!!解散!!」

「あーっと、西A-4つと……」
こなたの地図を見ながらサークルを探す
「ここか……って列めっちゃ長っ!!」
そこには長蛇の列
30分はかかるか……

30分後

「えーと、とりあえず新刊全部三冊ずつ」

「はい！3000円になります！！（CV：くじら）」

「はい」

「ちょうどお預かりします！！ありがとうございます！！」
ようやく列から抜け出す

その後ろにはまだ大量の人間が並んでいた

「日本にはこれだけのあなたと同種の人間がいるんだな・・・」
軽く日本の未来が気になる光景である

「えーと、次はーっと・・・」

「つぎはここか・・・」

俺はすでに8つのサークルを回ってへとへとである

「けどここで俺の担当は終わりだ・・・我慢我慢」

こなたには今度飯をおごらせてやる

学食のAランチ（1300円）でいいか

「あれ？平野先輩っすか？」

「！？」

こ、この声は・・・

「うわーっ！！まさか先輩がここにいるとは！！」

「た、田村あ！？」

そう、我等が腐女子その1こと田村ひよりである

「お、お前こんなとこで何をー！！」

「わたしはこのサークルのメンバーっすから

むしろ何でこういうのに無縁そうな先輩がここに？」

少年説明中・・・

「なるほどー、泉先輩の付き添いつすか」

「ああそうだ！！決して俺が行きたかったわけじゃない！！」

そう、勘違いとかはされたくないからな

「だから俺はさっさと本だけ買って・・・」

「あー！せーちゃん先輩！！」

・・・この声、この呼び方！！

「や、八坂！！」

「うはー！！まさかせーちゃん先輩とこんな場所で会うとはー！！」

少年説明中・・・

「ほほー、友達のお供で・・・」

さっきと同じ説明をする

これでわかってもらえるはず・・・

「嘘だっ！！」

いや、そんなどっかのＬ５の女の子みたいな叫び方をされても・・・

「せーちゃん先輩に友達なんているはずない！！」

「ひでえなおい！！」

まあ、確かに中学時代の俺からは考えられなかったが・・・

「・・・前に一緒に買い物したとき聞いたでしょ」

お、この落ち着きのある声は！！

「永森！！」

「お久しぶりです」

ポニーテールに猫目の後輩がやってきた

「あれ？なんで永森までここにいるんだ？」

もしかしてお前も八坂みたいな趣味に目ざm・・・

「ちがいます！！ただの手伝いです！！」

いや、冗談だからそんなに叫ぶな

周りが見てるぞ

「・・・コホン、先輩は本を買いにきたんですよ
いくついるんですか？」

「えーと、新刊全部3つずつ」

「はい、4200円です」

「いいのか？俺まだ順番きてないぞ」

「いいんです」

永森にお金を渡して本を受け取る

「悪い、助かった

それじゃあ俺みんなのところに戻るから！！」

集合時間も近いので挨拶もそこそこに駆け出した

やまとview

「・・・せーちゃん先輩、笑うようになったね」

「そうね、ちよっと悔しいかな」

自分たちではできなかった

彼と一緒にいた時間はそのお友達よりも長かったはずなのに

「・・・それはそうと、やっぱり人手が足りないねー」

「そうね」

平野先輩と話してた分だけ仕事がたまってしまった

「・・・お、そうだ！！」

ひよりん！！その泉って人に連絡取れる！？」

「はい？まあ、取れますけど」

「今すぐに連絡とって！！」

・・・こうが笑ってる

この笑顔は・・・絶対によくないことを考えてる顔だ

セイカview

「はあ？サークルの手伝い？」

「うん、さっきひよりんからメールがあつてね」

「・・・まさか、田村のサークルの手伝いか？」

「そのとおりさ！！」

びっ！！と、こなたが親指を立てる

「こなちゃん、わたしはちよつと・・・」

つかさはさっきまで会場をさまよいまくって体力の限界に達したようだ

「大丈夫！！手伝いはセイカ君だけだし」

「はあ！？」

何で俺だけなんだよ！！

「つていうか、お前に来た依頼だろ！？」

かがみとつかさはいいにしてもお前は行けよ！！」

「いや、私は小神あきらのステージ行かないといけないからさあ」
「」

こいつ・・・殴りたい

「セイカ君、私も行こうか？」

かがみが救いの手を差し伸べた！！

「けど・・・」

「いや、かがみはつかさのそばにいてやってくれ

また迷子になったら大変だしな」

というわけで、俺は一人でさっきのサークルの場所まで向かった

「お！！来たつスね！！」

「きてやったぞ、ありがたく思え」

「まあまあ先輩、一応バイト代だすんで勘弁してくださいっス」

まあ、ならいいだろう

こんなイベントのために今日はバイト休みにしてもらったしな

ここで稼ぐか

「お！！せーちゃん先輩さっきぶり！！」

「ちゅきぶりです」

八坂と永森が合流する

ただ、気になる点がひとつ

「永森、その格好・
・
・
・
・
・」

「に、似合いませんか？ やつぱり……」

永森は八坂に着せられたのかメイド服を着ている

「いや、めちゃくちゃかわいいと思うぞ」

「あ、ありがとうございます……」

コスプレが恥ずかしいのか顔を赤らめる

ホント、永森は女の子だな

こなたとかにも見習ってほしい

「はいはい、せーちゃん先輩はフラグ乱立しなくていいから

先輩には客引きしてもらうんで」

「客引き？」

「はい、まあ客引きつて言ってもこれ着てお客に声かけてくればばっちりです!!」

そうやって八坂が一着の服とカラーコンタクトを差し出した

「……なんだ、そのどっかのエースパイロットが着る赤服と赤い

カラコンは？」

「やだなー、シ・アス力変身セットスよ」

「なんでその衣装なんだ？」

「今回の本は「キ×ン」本なんですよ」

「BLかよ!!」

「いらっしやいませええええええええええ！！」

おお、中の人ネタでも普通にわかる人が多いな
けど、この服蒸れるな

終わったらシャワーでも浴びるか

「先輩、大丈夫ですか？」

「おお、永森

今んとこ大丈夫だ・・・って、今度の格好は・・・」

「先輩が今やってるキャラクターの妹のコスプレだそうです

これ着て一緒に客引きしてこいって」

・・・ホントにあいつらは何でも持つてるな

「で、具体的にどうすれば・・・」

「・・・えい！」

永森が掛け声と同時に腕にしがみついていた

「えっと・・・お兄ちゃん」

ズゴーン！！

「だ、大丈夫ですか先輩！！

やっぱ変でしたか？」

い、いかん・・・

ゆたかとは違ったかわいさが・・・

つてか、永森の雰囲気微妙に梨花と似てるせいで余計に・・・

「いや、変じゃない、だいじょうぶだ」

「うん・・・お兄ちゃん」

さらに永森が引っ付いてくる

すると周りからは

『ここにシン×マユ本はあるか！？』とか

『うはｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗ』とか

『きた！！兄妹カップリング！！』とか聞こえてくる

中には写真とつてる人も・・・

「こうちゃん先輩」

「なんだい？田村一等兵」

「次の本はあのカップリングでいってみましようか」
「許可する」

「ちなみにせーちゃん先輩」

「なんだよ」

「給料はこれで」

「お、さんきゅー」

八坂から封筒を受け取る

中には……

「『永森やまと一日自由券』……ってなんだこりゃ」

「書いてあるとおりです、一日やまとを好きなようにご使用ください！」

「ぶふっ！！こう！？聞いてないわよそんなの！！」

永森から抗議の声が上がる

そりゃ抗議もしたくなるわな

「いいじゃんやまと、これをきっかけに既成事実……」

「そ、そりゃあ先輩ならべつにそういうことになってもいいとか、むしろなりたいたいとか……けど私たち高校生だし……」

「やまとー、もどつてこーい」

にしても一日自由か

……そうだな、掃除でも手伝ってもらおう

「あー、つかれた……」

「セイカ君おつー」

「お疲れ様」

「うわっ！軽くやつれてるわよ」

同級生組と合流することにはもう俺はへとへとだった

「もう二度と来たくない……」

「えー、冬もあるんだからまた一緒に……」

「だが断る！！」

こうしてコミケの夏は過ぎ去っていった・・・

第六話 おわり

第六話「迷走」(後書き)

さーて、次回のキミセカは！？

やまとです

先輩に一日自由券で家に呼ばれました

先輩と一日過ごす・・・少し楽しみです

次回「やまとといっしょ！」

おたのしみに

第七話「やまとといっしょ」

第七話

「さて、こんなもんか」

もともとは永森に手伝ってもらう予定だった掃除は思いのほか速く終わってしまった

だからせっかくなので、前につかさに教えてもらったクッキーを作っていた

我ながら良いできである

ピンポン

「おっとと、もう来たのか」

玄関まで向かう

扉をあけると見知った顔の後輩がいた

「こんにちわ、先輩」

「よう、早かったな」

「すみません、早すぎましたか？」

「遅れるよりは良いだろ」

まあ、入ってくれ」

永森を俺の部屋に案内する

「さて、俺は今日お前を一日好きにできるわけだが……」

「は、はい！」

「好きにくつろいでくれ」

「……は？」

「は？」とはなんだ「は？」とは

「もともと手伝ってもらうつもりだった掃除は終わっちまったからな
まあ、ここがいやなら帰るのも自由さ」

「い、いえ！！ぜんぜん嫌じゃないです！！」

「そうか、まあその辺座ってくれよ」

クッキー焼いたからさ」

永森ベッドに座ったのを見て俺は台所に向かった

クッキーからはまだ香ばしい匂いがする

紅茶のティーパックを引っ張り出してお湯を注ぎ、カップに注ぐ
それをお盆に載せまた部屋に戻った

「ほれ」

「ありがとうございます」

永森の隣に座る

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

無言で紅茶をすすりクッキーを食べる永森

「・・・・・・・・顔が赤いのはなぜだろうか」

それはそうとこうやって隣に座ると永森は女の子だなあ、と思う

クッキーや紅茶の匂いに混じって女の子特有のいい匂いがする

こなたたちもそうだが、近くによるとみんないい匂いがする
シャンプーの匂いだろうか？

「・・・・・・・・先輩」

「・・・・・・・・ん？どした？」

俺がそんな考えをめぐらせていると永森が話しかけてきた

「私はくつろいでいいんですよね？」

「もちろん、ゆっくりしていいってね！！」

「・・・・・・・・どれじゃあ、お言葉に甘えて」

コロン、と永森が横になる

頭を俺にひざに乗せて

「・・・・・・・・・・は？」

「今日一日は、先輩に甘えさせてください」

その永森のセリフで俺はあることを思い出した

中学のころ

『せーちゃん先輩！やまとって実はかなりの甘えん坊なんだよ』

『・・・あいつがか？ぜんぜんそうは見えないが・・・』

『だから、あの子が甘えたがってるときはやさしくしてあげるんだよ！』

『・・・そんな日はこねえよ、きっと』

「そんな日が来たよ、おい」

甘えさせてほしい、か

そういえば梨花も時々俺の膝枕で寝てたっけ

そのときは確か・・・

「・・・ん、先輩？」

「いやだったか？」

頭をなでてやる

できるだけやさしく

「・・・うん、ありがとう」

永森の言葉遣いかわる

八坂の言っていた甘えん坊モードだろうか

「・・・大好きです」

最後の一言は、小さすぎて俺の耳には届かなかった

「ふああ、ちよつと俺まで眠くなってきた」

足がしびれてきたのでそつと永森の頭を浮かして足を抜く
その間に枕を置いてはい、完璧

「ふう、俺も少し横になるか・・・と」

永森の隣に寝転がる

またさっきの女の子のにおいがした

寝顔を覗きながら頭をなでる

つてか、マジで眠くなってきたぞ……………

やまとview

「…………あれ？」

まぶたを開ける

ああ、そういえば先輩の膝枕で寝ちゃったんだっけ……………

…………今思い出すとすごく恥ずかしいことをした気がする

あああああくあwせdrftgyふじこ1p

……………つて、あれ？先輩は

リビングにでも行つたのかな…………それともお手洗い？

…………あ、この布団先輩の匂いがする

男の人なのに結構いい匂い……………はっ！！なにやってるの私！！

反対に寝返りを打つ

それでこのバカな考えを吹き飛ばすつもりだったんだけど……………

「すー、すー」

ななななんて先輩が私の隣で寝息を！？

それに何気に腰に手を回されて身動きが……………

あっ！寝息がかかつて……………

セイカview

「ふあゝ、あゝ、寝ちまったのか」

軽く横になるだけのつもりが結構寝てしまったようだ

あ、永森は？

後輩の姿は探すまでも無く目の前にあった……………のだが

「……………なんで顔真っ赤にして目を回してるんだ？」

その後夕食と一緒に食べた

時間が遅くなってしまったので泊まっていくように誘ったんだが激しく拒否された

部屋はあまつてるから問題ないのにな……………

俺からすると、ただのんびりしただけの一日だった

第七話 おわり

第七話「やまとといっしょ」(後書き)

さーて、次回のキミセカは！？

セイカだ

こんどこそ本物の祭りに行くようにこなたに誘われた
花火大会か・・・虫除け対策はばっちりと！！だぜ
そういえばゆたかと岩崎って仲良いよな

・・・岩崎さん？目が何か怖いそ・・・・・・・・

次回

「空に花が咲く夜に」

お楽しみに

第八話「空に花が咲く夜に」

第八話

とある日のメール

『祭りにい かな い か』

こなた、いいかげんその誘い方は食傷気味だぞ

と、いうわけで

「ういゝす」

「お、やっときたわね」

「セイカ君おそいよ」

俺が待ち合わせ場所につくころにはすでに柊姉妹がそろっていた

「悪い悪い・・・こなたは？」

「見ればわかるでしょ」

「まだ着てないんだよね」

まったく、誘ったあいつが遅刻でどうするんだよ……………

まあ、あいつらしいと言えばそうだが

「おまたへ」

「やっとなたか」

「ごめんごめん、電車混んでてさ」

「全員そろったし次の集合場所へ行くか」

今回は一年生組みも一緒に行くらしい

ゆたかはこなたの家に住んでるが田村たちと先に合流するそうだと
いうわけで、次の駅

「あ、先輩たちきたつすよ」

「コツチでスよー!!」

「おねえちゃん！おにいちゃん!!」

そんな大声出さなくても聞こえてるって……

「やふー、コツチはそろってるねー」

「あとはみゆきの家に行くだけだな」

会場がみゆきの家に近いいためそこを最終的な集合場所
にしている岩崎は家が近いからさきにみゆきの家に行っている
そうだと

「さて、そろそろ行くか」

「あら、いらつしゃい」

みゆきの家に着くとゆかりさんが出迎えてくれた
相変わらずのほんとしたお方である

「みなさん、いらつしゃいませ」

私服姿のみゆきが出てきた
なんか高そうな服着てるな

さすがはお嬢様

「いえいえ、これは軽く着こなすために買ったので2000円くら
いなんですよ」

「マジでか!？」

つまりはあれか？お嬢様補正のせいで高級品に見えたのか!!

「みゆきさんはオーラが違うからねー」

「みゆきが身につけてるとなんか高そうに見えるわよね」

「これも生まれの差ってやつだな」

「・・・セイカ君も見た目は人のことはいえないよね」

こなたが何か言ってるがよく聞こえなかったのでスルー
どうせろくでもないに決まっている

「お、岩崎はもう来てたんだな」

「・・・こんばんわ、先輩」

我らがクールでかつこいいみなみちゃんこと岩崎みなみである

「クールでかつこいい・・・ぷくく」

なぜかゆかりさんが笑い出した！！

「えと・・・その・・・」

そしてなぜか岩崎の顔が赤くなってる！！

「（。。。）何ゆえ！！」

「（＝＝）こつちみんな」

冗談はこのくらいにして

「はい、よかったら食べていって」

俺たちの目の前に並べられたお高そうなメロン！！

ちなみに今みゆきの胸を想像した奴は表に出る

「ちがうねセイカ君！！みゆきさんのスイカだよ！！」

「た、たしかに！！」

「お前から自重しろ、っていうか、セイカ君はこつち（突っ込み）側
でしょうが

いっしょになってボケてどうすんのよ」

「正直スマンかった」

俺たちがメロンを堪能しているとみゆきが浴衣に着替えてやってきた
しかしあれだな

「これだけかわいい子たちが浴衣姿だと壮観だな」

ズキューン

（また始まったよ・・・セイカ君のフラグ建築）
（もはや病気よね）
（どんだけ〜）

ところ変わって花火会場

え？移動が三行の改行で終わってるって？

気にスンナ、俺も気にしない

「もうすぐですかね〜」

「ヒヨリ、気が早すぎデス」

はしゃぐ者もいれば

「たまやー！！」

「まだ始まってないわ！！」

ボケに見事な突込みを入れる者も

「ゆきちゃんもたべる？わたがし」

「あ、いただきます」

のんきにわたがし食ってるのもいる

ちなみにお値段は136円

なんともまあ・・・微妙な数字だ

まあ、そんなことよりも・・・

「・・・ゆたか、大丈夫？」

「だ、大丈夫だよみなみちゃん」

「ん？大丈夫かゆたか

顔色悪いぞ」

ゆたかの体調が優れないのか顔を青くしていた

「だ、大丈夫・・・おにいちゃんの花火を見てて？」

「何言ってるんだ、少し人ごみから離れよう」

近くにいたこなたに事情を話して人ごみから外れた

「岩崎、飲み物買ってくるからゆたかをたのむ」

「あ・・・はい」

俺はさつき見つけた自動販売機まで走った
さて、ゆたかは気分が悪いみたいだしジューズ系よりもお茶のほう
がいいかな

サン リーのウーロン茶を買ってさつきの場所に帰った

「ただいま・・・って、ゆたか寝ちまったのか？」

「あ・・・はい、少し横になるって言ってそのまま」
ならしょうがない

岩崎がゆたかに膝枕してるので俺はベンチの開いてる場所・・・岩
崎の隣に座った

「お前はつらくないか？」

「大丈夫です」

遠くでは花火の光が見える

さつきの場所ほどではないがここからでも十分花火は堪能できるだ
ろう

「・・・・・・・・平野先輩」

「ん？どした」

「私は・・・ゆたかに必要なんでしょうか」

「・・・・・・・・・・は？」

いきなり何を言い出すのだろう

「ゆたかと友達になって・・・私がゆたかを守らないとって思いま
した

「だけど、それは先輩にもできることで・・・」

「・・・・・・・・・・」

「さつきもそうです、先輩はゆたかのためにつて動くことができた
のに私はどうしたらいいの かわからなくて」

「・・・・・・・・・・」

「だから、私なんかより、先輩が・・・・・・・・・・」

「うりゃー！」

びしっ！！

「きゃっ！」

岩崎にデコピンを入れる

「な、なにを・・・」

「今の言葉、ゆたかの前で言ってみろ

俺はお前を軽蔑するね」

「え・・・」

「お前は難しく考えすぎなんだよ

友達つてさ、一緒にいたいから友達なんだよ」

「・・・」

「そんな難しい理屈なんかいらないさ

話したい、仲良くしたい、一緒にいたい

それだけでいいと思うけどな」

なんて、何俺が偉そうに語ってるんだか

こなた達がいなかったら、俺は今頃・・・

だったら、みんなが俺にしてくれたことをこいつにしてやればいい

俺たちが、親友になった日にしたことを

「いいか、先輩命令だ」

「は、はい？」

反論は一切聞きません

「俺のこと、セイカって呼べ

わかったな、みなみ」

「え・・・？」

あの日

互いに名前で呼び合ったあの日

俺は初めてあいつらを友達と意識したのかもしれない

「ほれ、呼んでみろよ」

「え・・・その・・・」

「ほれほれ」

「・・・セイカ・・・せんぱい」

ふむ、まあ先輩付けくらいは勘弁してやろう

ゆかりさんがこいつを弄りたがるのもわかる気がする

ゆたかもすっかり目を覚ましたころ

こなたたちが戻ってきた

「おゝい、きれいだったね」

「ああ、こんなところで結構見えるもんだな」

だが、みんなはしきりに腕や足を掻いている

まさか、難見沢症候g……

なわけないか

「けど、漫画みたいにきれいなまんまでは終わらないよね、いっぱい刺されたよ」

「うっくかゆい」

どうやらみんな蚊に食われたようだ

「ゆたか、みなみ、お前らは平気か？」

一応無視刺されの薬は持ってきたんだが

「私は……大丈夫です」

「私も大丈夫だよ」

そか、ならこれはこっちの少女軍団にわたすでしょう

「蚊に刺されやすい人と刺されにくい人っているよね」

「いや、これは蚊が空気呼んだんでしょ」

そういうとこなたがススとよってきた

「いつの間にかみなみちゃんにもフラグを立てたご様子」

「何の話だ」

みんなを駅まで送って別れた

「今日は、みなみとの距離が少し縮まった気がするな」

やっぱり、女の子は笑ってるほうが似合う

それはみなみも例外ではないさ

「さて、さっさと風呂はいつて寝るか!!」

その夜に、俺は大量に蚊に刺された

第七話 おわり

第八話「空に花が咲く夜に」(後書き)

さーて、次回のキミセカは？

こなたです

お盆だというのに・・・なぜ補修がある!!

って、あれ？あんな子うちのクラスにいたっけ
って、あの名前・・・えええ!!

次回

「一日だけの再会」

あれが・・・セイカ君の・・・

お楽しみに!!

「よし、聞きに行こう!!」

「いつてらっしゃい」

「セイカ君が!!」

「俺かよ!!」

「……まあいい、このノリもいつものことだ

その女子生徒の席に向かう

そして、声をかけた

「なあ、あんたちよつと……!!?」

その女子生徒が振り向いた

一言で言えば、かわいい

だが、俺が驚いたのはそんなのが理由じゃなかった

(……梨花?)

今はもういない、俺の妹

梨花にそっくりだったのだ

もし、あの後も生きてて無事に育ったらこうなっていただろう

「……どうかしたの?」

「あ、いや……あんたこのクラスの人じゃないよな?

何組だ?」

「……うん、私はこのクラスの人じゃないよ」

やっぱりそのようだ

だけど今はそんなことよりもこの少女の容姿が気になる

「ちなみに言うと、この学校の人でもないよ」

「……え?」

その少女は立ち上がって、俺に近づいた

そして、抱きついた

「……久しぶり、お兄ちゃん」

がしっ！！その子の手をつかむ

その手を引つ張りながら俺は教室のドアを開けた

「こなた！お前もきてくれ！！」

「え、ちょー！！セイカ君！？」

そしてそのまま走り出した

ところ変わって、屋上

「さて、あんたには聞きたいことがある」

「実の妹にあんたよばわりはひどいと想いまーす」

「ふざけんな！俺の妹はもう・・・」

「死んでる、だよな」

「・・・そうだ」

この少女はどこで俺のことを知ったんだろう

そもそも、俺が今まで気をなくしてたからその事実を知っていたのは両親のみ

取り戻した後でも知ってるのはこなた、かがみ、つかさ、みゆきだけだ

「そりゃあ知ってるよ、本人だもん」

「そんなわけあるか！！ふざけんのもいい加減にしろよ！！」
つい大声を出す

この少女の外見が似ているがゆえに、あまりにも雰囲気と同じゆえに
「セイカ君落ち着きなよ！！」

「・・・」

こなたの一喝で押し黙る

すると、少女が口をあけた

「・・・お兄ちゃんの恥ずかしい思い出、その一」
「・・・は？」

「私を助けようと喧嘩を始めたところに転んで気を失って保健室送りになった」

「なっ!!」

「その二、キャンプに行ったときに森で遊んでたら顔にクモがつついて泣いてた」

「ぶふっ!!」

「そのさn・・・」

「も、もういい!!わかった!!」

この事実を知ってるのは両親が梨花ぐらいしかいないはず・・・
つてか、こなた!!笑うな!!

「ふっふん、ちなみにその三十六まであるよ」

み、認めるしかない・・・

こいつは、梨花だ

「で、なんで死んだはずの梨花がこんなところにいるんだ？」

足もある、触れられる

どう考えても幽霊じゃない

「セイカ君、死者蘇生の魔法カードでも使った？」

「ネタに走るな

で、どうしてなんだ？」

「だって今日はお盆じゃない」

・・・・・・お盆と言う理由で死んだ奴がよみがえってたら

今頃世界は大騒ぎだ

聖徳太子が実在したかも確かめられるぞ

「実は私もよくわかんないんだ」

なんて投げやりな・・・

「まあまあ、細かいことはいいじゃないのさセイカ君」

こなたが小声で俺に話しかけてくる

（お盆に戻ってきたって事は、たぶん明日にはいなくなっちゃうん

だと思っよ)

・・・そうか

っていうか、戻ってきた理由なんてどうでもいいじゃないか

「なあこなた、先生に俺は早退するって言っといてくれないか？」

「・・・うん、まかせといて！」

俺は立ち上がると梨花の手をつないだ

「ど、どうしたのお兄ちゃん？」

「今日は遊ぶぜ！！丸一日な！！」

「が、学校は！？」

「川、ー、ー、何、気にすることはない」

俺は梨花を連れて走り出した

第九話「一日だけの再会」(後書き)

さーて、次回のキミセカは!?

梨花です

これから、お兄ちゃんと遊びます!!

きつと明日はもういないけど・・・

今は甘えてもいいよね・・・? お兄ちゃん

次回「想いは共に」

おたのしみに!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5639g/>

らき すた キミがいるセカイ NW

2010年10月10日18時20分発行